

帝国を引き継ぐ文学形式 —1992年以降の日本現代文学における北朝鮮表象、村上龍『半島を出よ』を中心に—

著者	呉 世宗
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
号	93
ページ	167-180
発行年	2019-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002330/

帝国を引き継ぐ文学形式

— 1992年以降の日本現代文学における北朝鮮表象、 村上龍『半島を出よ』を中心に—

呉 世宗

1. はじめに

日本の現代文学において、1992年に明らかとなった拉致問題を一つの契機として定着したテーマに、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮ないし北と略記）を扱いつつ、悪として描き出そうとすることが挙げられる。

92年以降、北朝鮮および関連する人や組織を登場させる作品としては、例えば『日本朝鮮戦争』『米韓連合軍 vs 北朝鮮軍』『朝鮮日本侵略』『亡国のイーゼス』『スリーパー』『クルス機関』『国境』『受命』『三たびの海峡』『宣戦布告』『プラチナ・ビーズ』などがある。和田春樹他編著『北朝鮮本をどう読むか』（明石書店、2003年）がこれらの小説のいくつかについて言うように、そのほとんどは北朝鮮を「理性なき殺人国家」として描き、反感を煽るものとなっている。日本の報道などにおける北朝鮮についての言説を文学が追認・補強する形となっているのである。そしてこのことは、日本が被害者であることを声高に訴え、また「国家テロリズム」を叫ぶ報道と平行・連動するように、拉致事件から現在まで文学が北をめぐる語りの定型化を生み出し続けていると見てよい。

本稿では、北朝鮮を登場させる作品の一つ、2005年に発表された村上龍『半島を出よ』（幻冬舎）を取り上げる。というのもこの作品は、比較的しっかりと文献調査（日本語文献を中心に）をしたうえで北朝鮮を描く一方で、図らずも過去の帝国主義を呼び出す内容となっているからである。つまり荒唐無稽な他の作品群とは一線を画しつつも、だからこそ深刻な問題を露呈させている作品となっているのである。以下、『半島を出よ』の読みを通じて、この作品がどのように北朝鮮を描き出しているのかを確認するとともに、それによって92年以降の日本現代文学における北朝鮮表象が、結果的に何をもたらしているのかを検討してみたい。

1 和田他編著『北朝鮮本をどう読むか』、149-50頁。

2. 『半島を出よ』に見られる北朝鮮認識

2005年に公刊された『半島を出よ』は、近未来（2011年）の日本・福岡を舞台にしているが、そこで設定された日本の状況はこうである。

アメリカのアフガニスタン、イラク、イランへの軍事的介入が失敗し、ドルの急激な下落が起こる。にもかかわらず、それと入れ替わるように円が下落してしまう。加えて国債と株も暴落し、都市銀行さえもが破綻する。国の経済破綻を食い止めるべく、日本政府は預金引き出しの制限政策を取り、さらに円とドルやユーロとの交換を停止する。また消費税が十七・五%まで上昇し、結果としてかなりのインフレとなり、失業率も八%（実質十五%）まで上昇するに至る。追い打ちをかけるように、食糧自給率四〇%以下という現状も日本経済を破綻へと追い込んでいく。アメリカが没落する日本の足元を見るように、家畜用のトウモロコシの価格を三倍に釣り上げるからである。

経済的に弱体化した日本は、アジアからも欧米からも相手にされなくなる。それだけでなく米国が中国に武器を公然と売り、南北朝鮮の戦争状態終結に向けた交渉を始めたため、在日米軍との関係も悪化する。そのように国際社会から孤立すると、日本国内では反米愛国を叫ぶ声が噴出し、核武装論が公然と語られていくことになる。失われた経済力に基づくプライドを核武装で補おうとする主張が人々に受け入れられていくのである。このような状況が利用されて起こるのが、「高麗遠征軍」と呼ばれる軍事組織（実質的に北朝鮮の人民軍）による福岡市の占拠である。この作品は、以上の日本の状況のもと、高麗遠征軍による福岡市の占拠、為す術のない日本政府、そしてイシハラグループと呼ばれる者たちによる抵抗を主要な要素として展開する。

村上は、日本経済が破綻した場合に起こりうることの一つに北朝鮮からの侵略を挙げたわけだが、それは当然92年の拉致問題を意識したためと考えて間違いない。その意味で作品の状況設定は、92年以後の日本と地続きである。そのため攻撃的で何をするかわからない不気味な存在という北朝鮮イメージを、『半島を出よ』も一定程度共有していると言える。とはいえ村上の狙いは、上述した破綻を回避するためにいかなる方策があるのかを日常生活に寄り添いつつ提示しようとするものであったと考えられるのであり、そのため北を悪として叩くという単純さは避けられている。しかし検討すべきは、このことが結果的に何をもたらしたかである。

まず日本政府および関連機関を除く、この作品の二つの主要登場グループについて論じていきたい。というのも日本政府はほぼ一貫して為す術がないままであり、残りの二つのグループがこの作品の進行及び構造を支えているからである。

作品内の設定では、北朝鮮はアメリカと交渉を持つ一方で、中国との関係に苦慮している。中国は朝鮮半島をアメリカとの緩衝地帯としておくべく、統一を阻止しようと考えているからである。そのような困難な国際的状況に北が置かれているゆえに、人民軍内には、中国が傀儡政権を準備しており「將軍同志」も北京に移るのではという噂が流れている。他方、その噂は軍の統率を乱す危険があるため、「親愛なる將軍同志」は人民軍に対する監視を強め、軍内部の保守強硬派（「第八軍団」）の反発が生まれてしまっている。

人民軍の主として対外破壊工作に関わるメンバーたちが招集され、「高麗遠征軍」として福岡を占拠せよとの司令が下されるのは、そのような国際的国内的問題が深刻化する中においてである。人民軍ではなく「高麗遠征軍」という名で福岡制圧作戦を遂行するのは、北の政権に対する「反乱軍」と偽装することで、作戦が失敗した場合でも国家に責任が向かわないようにするためであり、何よりも強硬派「第八軍団」をそこに組み込み共和国から排除しようとするためである。それゆえ高麗遠征軍は、「反乱軍であつて反乱軍ではなく、反乱軍ではないが反乱軍でもある」²という位置付けを与えられることになる。

他国の占拠によって国内外の困難を一度に解決しようとする占拠作戦は、九名で一部施設を占拠し（フェーズ1）、航空機で四個中隊の特殊部隊を侵入させ橋頭堡を築き（フェーズ2）、十二万人の一個軍団を投入し、完全に福岡市を制圧する（フェーズ3）という三段階に分けられ遂行されていく。フェーズ1の先発部隊は「遠征軍」の中心であり国家に忠誠を誓う者たちによって構成され、国のためであればその国さえも捨てることを誇りとする部隊である。

ここに集まった十一人がこの画期的な陰謀の中心となるのだ。男として、また軍人として、そして党员としてこの共和国に生を享け、これほどに心躍ることが他にあるだろうか。（52頁（上））

したがって国家の危険分子を取り除くために、人民軍の精鋭が犠牲にされることになる。しかしこのことは、後に見るように、北朝鮮との繋がりが——偽装としてではあれ——切れた高麗遠征軍に対する「啓蒙」というテーマも可能にすることになる。

次にもう一つのグループである、イシハラグループと名付けられた、いわば社会不適合な男たちの集団である。イシハラと呼ばれる、詩人とされる男のもとに集まった者たちは、福祉施設に放火したり、兄が両親を殺すところを目撃

2 村上龍『半島を出よ』（上）（幻冬舎、2005年）、51頁。以下、『半島を出よ』から引用する場合は、直後に頁数と（上）あるいは（下）だけを示す。

したり、ハッカーであったり、新幹線をハイジャックし日本刀で車掌を殺害したりなど壮絶な経験をした者や、社会から逸脱してしまった者ばかりである。メンバーとなった後も、ある者はカエルや毒ムカデを大量に飼育し、ある者は武器を密輸したりしている。

加えてイシハラグループのメンバーたちの多くは、日本全国に運用されたことになっている住基ネットに組み込まれず、それゆえ住民票コードを持たない／持てないために本人照合が困難な、つまり法的には存在しない者たちである。関連して言えば、イシハラグループのメンバーは、あえて自ら名乗ることもしない。

タテノは自分の名前を呼ぶ声を聞いた。おいタテノ。故郷を出てから名前を呼ばれることはほとんどなかった。誰にも名前を教えなかったからだ。〔…〕〔名前を聞いてくる〕連中に対しては、殴られても脅されても絶対に自分の名前を言わなかった。〔…〕名前を言いたくない人間がいるのがそんなに変なことなのだろうか。きっと名前を言わない人間が怖いのだろう。だから、名乗ることは屈服の第一歩なのだ。(78頁(上))

要するに法制度的に不可視化され、みずからも名乗らないことで社会的に孤絶した者たちが集まっているのがイシハラグループなのである。イシハラグループのメンバーたちは、「タテノ」のように全員カタカナで表記されているが、それはこの孤絶し不可視的に存在するという特徴を強調するためであろう。

以上、高麗遠征軍とイシハラグループを見てきたが、両方に共通しているのは「匿名」だということである。高麗遠征軍の作戦に対して、「これは正規軍による軍事作戦ではなく人民軍内の反乱組織によるテロだという声明を〔北朝鮮は〕だすだろう。」(54頁(上))とはじめから決まっているように、福岡占拠の実行は匿名的なテロとして行われる。イシハラグループの匿名性に関しては、すでに論じたとおりである。

とはいえ両者には差異があり、高麗遠征軍は匿名的でありつつも、主要メンバーたちは共和国に対する忠誠心を強く持っている。その意味でこの匿名性は、その背後の本体的存在と強い関係のもとにある。他方でイシハラグループは、犯罪等によりそもそも孤絶して存在しており、日本社会との繋がりがなくはないものの、その関係性はとても弱いものとなっている。

アントニオ・ネグリは、モル的／分子的という、ドゥルーズ、ガタリ由来の概念を用いて、社会集合体のあり様の明確化を試みている。モル的な集合体は、「結束し統一した集合³」のことであり、例えば「人民軍」や「韓国軍」と

3 アントニオ・ネグリ『〈帝国〉をめぐる五つの講義』小原耕一他訳、青土社、2004年、80頁。

いった、数えられるほどの明確な境界を備えた集合体である。数えられるということは、それぞれの集合を明確な対立関係に置くことができるということである。他方で分子的とは、非同質的な要素群が差異を交差させつつ集合へと凝集していく性格を持つとされる。動的な状態にあるネットワークだと言ってもよい。もちろんこれはアントニオ・ネグリの言葉で言えば「マルチチュード」である⁴。

この二つの集合体の区別を用いるならば、『半島を出よ』においてモル的集合体は「高麗遠征軍」、分子的集合体はイシハラグループと見なすことができる。高麗遠征軍は匿名的ではあれ、人民軍と事実上のつながりを強く持ち、他方独自に高麗遠征軍打倒の作戦をたて、最終的に壊滅させるイシハラグループは、打倒後も一貫して日本社会の周辺に個々の差異を保持するからである。実際イシハラグループは常にその形を変化させ、動的なネットワークとしての集合体という性格を持続させる。作品の最後は、犠牲になった者たちに替わるように、「イワガキ」という新たなメンバーらしき人物が登場する。これはメンバーの「取替えが利く」ということでもあるが、このグループが常に生成変化し続けることの証左にもなっていよう。またイシハラグループの闘いの結果、無力な日本政府を尻目に、解放された福岡の街自体が自立的に再生していくことになる。言い換えると没落する日本の内側で生まれたマルチチュードが、内側から日本を変質させていくのである⁶。

そのように「分子的」なイシハラグループは、本作品において独自の魅力を発揮している。しかし本稿では、「モル的」という概念を参照しつつ、高麗遠征軍の、したがって北に対する村上の認識を浮き上がらせてみたい。

くり返すならば高麗遠征軍は反乱軍を偽装しているだけなので、実質的に「結束し統一した集合」（＝人民軍）である。この結束はあまりに強固であるために、同時に強力な排除を生むものにもなっている。「総連の同胞」でさえ排除対象となるほどなのである。

「〔占拠作戦に〕海外同胞の協力は必要なのか」／キム・グアンチョルは〔…〕総連が協力を申し出ても断り、命令を無視して近づいてきたら射殺せよということです。〔…〕総連は一世の指導者がことごとくいなくなったあとその性格を変化させております。若い世代の多くが日本人と同じような意識を持つようになり、

4 ネグリ前掲書、80-7頁。

5 松浦寿輝・星野智幸・陣野俊史「鼎談 村上龍『半島を出よ』を読み解く」『文學界』、2005年7月号、星野智幸の発言、137頁。

6 松浦寿輝は、「モル的」「分子的」に代わって、見田宗介の「最適社会」「コミュニン」という概念を用いて高麗遠征軍とイシハラグループを説明している（松浦寿輝・星野智幸・陣野俊史前掲鼎談、132頁）。

特に、平壤声明以降、拉致事件を巡る世論の攻撃に遭って祖国への忠誠心を失いかけていますが、要するに、いつも同志が言うておられるように、犬に育てられたオオカミは犬になる、ということでもあります。総連の同胞にはいかなる特権も与えず、日本人と同様に扱います。(55 頁 (上))

また「あいつらは、何でもいいんだよ。あいつらのテーマは排除することなんだ。自分たちと違う連中を排除するだけなんだ」(381 頁 (下)) というイシハラグループのシノハラ言葉は、この集合体の本質を突くものとして機能しており、遠征軍の結束と排除という性格は、作品において重層的に際立たせられている。

そのように多角的に補強される強力な結束という規定こそが、『半島を出よ』が描き出す北朝鮮のイメージの中心となる。このイメージは「偉大なる金日成首領同志と親愛なる金正日將軍同志への無条件の崇拜」(132 頁 (下)) を教訓とする、かなり硬直した戦士の共同体として北を具体化し、そしてそれは柔軟性なく、命令に絶対的に服従する機械、軍務以外の何かを欲望することが禁じられ、また感情的なものの表出が極度に抑制された組織であり人々と表象されるのである。言い換えると、下着さえも共有するほどの同質性を帯びた者たちの共同体は、他者が存在し得ない集団であり、国家なのである。「モル的」な性質を極限的に推し進めた表象となっていよう。

村上龍によるこのような表象は、登場人物の二人、黒田元治と尾上知加子の気づきにおいて極まることになる。

こいつらが福岡に順応すると思ったら大間違いだ。病気の間人や虫に対する態度でわかったのは、こいつらの排他性と閉鎖性だ。異質なものは排除するという考え方が、頭ではなく内臓に刷り込まれている。だから非協力的で反抗的な組織や人間を社会から排除するのは、彼らにとっては善なのだ。金日成や金正日はそういう国民的特性をうまく利用して政敵を粛清し恐怖政治を維持したのだろう。／ […] [北朝鮮は] そもそも外部そのものが嫌いなのだ。(225 頁 (下))

尾上知加子は [「北朝鮮人」に対して] 受け入れがたいものを感じる。 […] 最初のうちはそれが何なのかわからなかったが、やがて貧しさと無知からくる一種の薄汚さではないかと気づいた。どうしようもなく垢抜けない感じが、ちょっとしたことに表れるのだ。 […] また彼らには共通して、あきらめに似た極端な従順さと、その裏返しの高圧的な態度、そして外部への強い不信と嫌悪があった。(350 頁 (下))

黒田も尾上も「恐怖政治」「極端な従順さ」という言葉によって、北朝鮮及び高麗遠征軍が硬直的なピラミッド構造を持つ国家や組織、「外部」それ自体

を嫌悪し抑圧するものと示唆している。つまり強固な結束は、結局のところ人間性を喪失した空虚な結束として表象されるのである。これが『半島を出よ』の基本的な北朝鮮認識でありその表象だと見なしてよい。

ところでこの他者の不在は、軍が兵士たちに厳しい訓練を課し続けることで軍隊内に差異が入り込ませる余裕を与えないためだけでなく、クーデターを防ぐために互いに監視させているためでもある。そのため軍は一つの強固な集合体であるものの、しかし敵は外だけでなく自らの内にも存在することになり、そのため内部には友（「友だち」）が不在という奇妙な集団となっている。

特殊戦部隊士官も兵士も、友だちという概念がわからないのだ。友人がいないということではない。友だちというものがどういうものか、子どものころに身につけた記憶を忘れてしまっている。だから、集められたこの士官たちは、それぞれ自然に談笑したり、座談したりすることができない。(113頁(上))

友が不在のままの集合体とは、先にも触れたとおり無条件に崇拜される金日成、金正日を頂点にした上意下達システムが貫徹する集団だということであり、メンバーに可能なのは「命令と服従と哀願」しかないということである(153頁(下))。

しかしこれは奇妙な集合体のあり様であろう。外にも内にも敵しかいないのであれば、他者しかいないということだからである。だがこの奇妙な集団の表象は、『半島を出よ』が持ち込む、北朝鮮の他者を浮上させる仕掛けとなっている。というのも、作品においては高麗遠征軍から逸脱するように、その内側から潜在的な他者が可視化されるからである。そしてこのことは高麗遠征軍を通じて北朝鮮を硬直的排他的な国家として描き出しつつ、彼／彼女の中の他者を出現させることで北朝鮮を訓育可能な存在として位置づけ、没落していく日本を浮上させようとする別の政治を作動させるのである。

3. 帝国を引き継ぐための啓蒙

イシハラグループによって壊滅する高麗遠征軍であるが、その内の二人が生き残ることになる。一人は男性兵士のチョ・スリョン中尉、もう一人は女性兵士のキム・ヒャンモク少尉である。甘いマスクのチョ・スリョンは、高麗遠征軍の宣伝担当としてNHK福岡で番組を受け持っていた最中であつたため死を免れる。「愛らしい」キム・ヒャンモクは物資の仕入れ全般を担当しており、イシハラグループが作戦を実行した日は国立病院機構九州医療センターを訪れていたために、同じく死を免れることになる。

二人が生き残った理由はそれぞれであるものの、北朝鮮が嫌悪する外部と接

触したという点が共通する。外部と接触することで、北朝鮮国内、人民軍内、高麗遠征軍内では起こらない経験を二人はすることになる。国内、軍内では起こらない経験とは、外部の者に対して恋愛感情あるいはそれとも似た親愛の情を覚えることである。チョ・スリョンはNHK福岡のアナウンサーである細田佐起子に恋愛感情を覚え、キム・ヒャンモクは九州医療センターの老医師・世良木勝彦に対して親愛的な感情を持つのである。

このことの意味を明確にするために、まず『半島を出よ』では、北朝鮮のとりわけ知識層が日本に対してアンビバレンツな感情を持っているとされることに触れておきたい。一方で植民地化に対する憎しみと、他方で西欧と「堂々と戦った国」あるいは近代化を自国に対しても朝鮮半島に対しても施したことへの「敬意」という相反する感情のことである（153頁（上））。近代化を善とするからこそ生まれるこのようなアンビバレンツな感情は、あらためて言うまでもないほどに使い古された植民地肯定論の文脈上にある。村上がこのような言説を無批判的に持ち出すのは、北朝鮮内や軍隊内で不可視化されていた他者が現れ出る契機とするためである。

チョ・スリョンとキム・ヒャンモクが高麗遠征軍（したがって北朝鮮）の他者として現れ出るにあたって、二人は自分の内側からまず変容していくことになる。その際、この二人の兵士が自らの内に持ち合わせている、前近代／近代という価値基準を基盤とするアンビバレンツな感情が変容の契機となるのである。

〔將軍同志の〕絶対性に対してチョ・スリョンは、春の日差しのような親近感と、冷たく醒めた違和感の二つを同時に抱いている。二人を天子と仰ぐ儒教的精神と、それは非科学的で前近代的だという批判精神が、混じり合って心の中に同居しているのだ。（132頁（下））

この個人が抱えるアンビバレンツな感情を明確に意識させ、実際彼と彼女を高麗遠征軍に対する他者へと変容させていくのが恋愛や親愛の情なのである。すなわち広く愛という回路を通じて、分裂する内面であったり、自分たちが置かれていた立場がどのようなものであったのかが明確に意識され、以前の自己からの変容が始まっていくのである。例えばチョ・スリョンは、気になり始めていた細田佐起子に命令を拒否されることによって、次のように気づく。

指示や命令を拒む人間に接したことがないというのは、そのあとの対応がわからないということだと、やっと気づいた。共和国では軍に限らず職場や学校や家庭でも、今の細田佐起子のように立場が下位にある者が、指示や命令を拒むこと

はない。[……] 絶対にあり得ないのだ。(152頁(下))

チョがもともと持っていた「非科学的で前近代的な」「儒教的精神」に対する「批判意識」は、気になっていた女性の可愛らしい命令の拒否によって目をさます。恋愛を通じて個人の内面的な近代化が起こり、それとともに「將軍同志」に対する「批判精神」が自立し始めるのである。言い換えると人民軍内で抑圧されていた他者が、愛という回路を通じて浮上するのである。

とはいえこれも目新しい設定ではない。一九一七年に李光洙が発表した『無情』ですでに提示された問題だからである。『無情』の内容・構成を図式的に言えば、二人の女性、儒教的な価値観を内面化した善馨と近代的な価値観を身に着けようとする英采がおり、その二人の間で揺れる主人公・亨植は結果的に英采を恋愛・結婚の相手として選んでいく(善馨も最終的には近代化の方に向かう)。そのような構成に基づくストーリー展開において李光洙が読者に呼びかけたのが、近代的な恋愛を通じた個々人の近代化であり、同時に朝鮮自体のそれであった。

李光洙が『無情』を発表したときは、「朝鮮近代文学」史の観点からすれば「新小説」と呼ばれる近代小説がすでに現れていた時期である。「新小説」の代表的な作品には李人植『血の涙』(1907年)があるが、そこでは清国よりも日本を重視する視線が露出していた。国際関係に対するそのようなまなざしのパラダイムシフトは、日本に留学経験のある李光洙も内面化しており、したがって近代的な行為としての恋愛と、それを通じた祖国朝鮮の近代化の呼びかけもまた、日本への「敬意」が根底的にあったとみなしてよい。チョ・スリョンの抱えるアンビバレンツは李光洙のものでもあったのである。

『半島を出よ』が反復しているのは、まさにこの李光洙的な近代化の構造である。つまりチョ・スリョンとキム・ヒャンモクの二人は、軍の外で恋愛や親愛の感情を覚えることで啓蒙されるが、その際前提となっているのが、北朝鮮／日本に重ねられた前近代／近代という認識の枠組みなのである。この前提に則った啓蒙により二人は、北朝鮮とは別の主体、すなわち共和国の他者と化していくことになる。

その際この使い古された観のある啓蒙には、『半島を出よ』独自の「徳」が結び付けられている。「徳」をもつての「啓蒙」とは、例えば、日清戦争の際に日本が出した宣戦布告に象徴的に現れたものである。当該布告においては、帝国日本が朝鮮を「啓誘」し国際社会の一員としたのに、清国はそれを陰に陽に妨げ朝鮮半島に派兵し、日本海軍の艦隊も要撃したため、日本は「仁義」を重んじ宣戦布告をすると述べられている。遅れた朝鮮を啓蒙し導くという理由

付けが、開戦の理由、そして植民地化の一步となったのである。

要するに一方向的に「正義」をかざし、その背後でそれに反することを行うのがこの場合の「徳」の本質であるが、『半島を出よ』でもそのような「徳」が恋愛や親愛としての「啓蒙」につきまどっている。とりわけ過去の植民地化を肯定も否定もしない素振りで実際のところ追認していく、老医師・世良木勝彦の言葉がそのような「徳」として機能し、女性兵士・キム・ヒャンモクを「啓蒙」していくのである。

ぼくたちは、あなたの国に対して悪いことばかりをしたわけではないが、良いことばかりしたわけでもない。道路やダムや鉄道や工場を造ったり、灌漑工事や干拓をしたが、ひどいこともたくさんした。[...]それが悪いことだと思わなかったんだ。(462頁(下))

この発言をした世良木は、少年兵として植民地化に関わった一人である。この発言自体は、日本は植民地期に善いこともしたという幾度も繰り返されてきた言説の一つでしかない。もちろん世良木の発言は善いと悪いを宙吊りにしており、単に善いこともしたと発言するに留まっていられないように見える。しかしこの発言の直後、世良木は次のように続ける。

悪逆非道というより、無知だったんだな。それで、無知ほど恐ろしいものはないんだね。(463頁(下))

「ひどいこと」を行った原因が「無知」だったからと説明するのは、植民地期当時は、善い／悪いの「悪い」が意識化されていなかったということである。言い換えると、現在的には善悪が宙吊りにされているが、当時は植民地化自体を盲目的になかば善行として受け入れ、そこに加担していたということである。そしてつまるどころそのように「無知」だったのだと言うことで反省の素振りを見せつつ、しかしそれによって悪行に対する責任を解除すること、世良木によるこの言説こそが『半島を出よ』での「徳」なのである。

この「徳」は、とりわけキム・ヒャンモクに二重の影響を及ぼすことにな

7 世良木は「無知」であることの暴力に気づいており、「「無知」であったことそれ自体を憎んでいる」という説もあるが、それは現在時だけを見ての解釈であろう。しかも世良木が善い／悪いを宙吊りにしていることからすれば、彼が無知の暴力性に気づいているかどうかとも疑問が残る。したがって「[世良木は]自分自身が犯した罪を忘れず、その痛みを自らの行動倫理として生きている点で際立っている」という石川の解釈は、分からなくもないものの、留保が必要である(石川巧「侵略者は誰か——村上龍『半島を出よ』」松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、2007年、195頁)。

る。世良木の植民地期の話聞いた後、キム・ヒャンモクは無知ゆえに飢饉の中で子どもを死なせてしまったことや、「子どもを可愛がれ」という父の言葉などを思い出す。その記憶は軍務の多忙さの中で封印されていたものであった。むろん無知ゆえに植民地支配に加担することと子を死なせてしまうことは同じではない。にもかかわらず、いずれも国家に盲目的に従属したゆえの加担と死であったために、「無知」は二人の経験を交差させ、翻って無知言説を有効化するのである。

第二に、無知は反省の契機を作り出しつつも、当時と現在を断絶するよう働く。無知であった自分と無知であったことに気付いた自分の間には、明らかな断絶があるからである。この過去と現在の切断が、この作品においては過去を受け入れ、かつ自分で自分を赦すよう二人を誘うことになる。事実世良木は、自分は「無知」であったのであり、決して「悪逆非道」ではなかったとすることによって、植民地化の問題を仕方がなかったものとして自らが受け入れやすいよう整えている。キム・ヒャンモクは、「天使」という言葉を世良木から教えてもらうことによって、子どもが天に召されたことを想像できるようになり、過去を受け入れ、自らを赦すきっかけを手に入れる(468-9頁(下))。断絶が過去を過去としてあらしめ、赦しを可能にするのである。

そのようにキム・ヒャンモクは「徳」としての「無知」の影響を被るが、重要なのは、彼女が無知であったことを受け入れることで、過去と断絶し、自らを赦すだけでなく目覚めた自己を立ち上げていくことである。それは無知言説が、先に述べた前近代／近代という対立を明確に起動させ、彼女を近代的自己に向かわせるからである。目覚めた結果としてキム・ヒャンモクは、高麗遠征軍が壊滅したことを知った直後も平静でいられる。

しかしキム・ヒャンモクは、不思議に悲しみや絶望はなかった。この破壊は天の怒りで、すべてゼロに戻るのだと思った。(474頁(下))

ここで言われている「天の怒り」は、天に召された自らの子の「怒り」と読むこともできよう。とはいえそのもう一方で、断絶をもたらす無知言説こそが、過去をリセットして(「ゼロに戻る」)現在を始め直すことを可能にもしているのである。そしてここで作動するのが、前近代／近代という対立である。これに関連して、村上龍は『半島を出よ』出版後のインタビューで、「近代化が達成される前の国の人間というのは、何か魅力がある。[...] 皮膚から魂まで近いようなきがするんですよ。」と述べている。⁸ 前近代的な国を生きる人は

8 「ロングインタビュー 村上龍『半島を出よ』を語る」『群像』、2005年5月、159頁。

純粹である、という目を覆いたくなる発言だが、だからこそあらためて近代的な主体を「ゼロ」から立ち上げることができるということでもあろう。いずれにせよ、上で見たようにして旧宗主国側の世良木は「徳」としての無知を語ることで、キム・ヒャンモクを近代へと導く。ここにおいて「徳」をもって日本が朝鮮を啓蒙し導くという図式が、『半島を出よ』において変奏され反復されているのを見ることができる。その意味で『半島を出よ』で読まれるのは、親愛の情と「徳」を通じた他者の浮上と一体化した、帝国の引き継ぎあるいは再始動とでも言うべき事態なのである。

4. おわりに——『半島を出よ』の文体と帝国への接続

これまで論じてきたことを踏まえると、『半島を出よ』は、結局のところいかなる文学形式を作り出したのだろうか。

本稿第二節で、村上が高麗遠征軍を極度に排他的で強固な集団として描き出していることを指摘した。加えてそれは「友だちという概念」が分からないほど空虚な結束であるとも論じた。これが村上の高麗遠征軍、すなわち北朝鮮の基本的イメージであった。

しかし他方で、『半島を出よ』は全二四章のうち七章が高麗遠征軍の兵士の視点から書かれており、この点は先行する論においてしばしば指摘されている。すなわち「他者を書く」とはどういうことかを「徹底的に考え抜く」ために必要な設定であったと高く評価するもの⁹、日本で流通する北朝鮮イメージを解体する役割を果たしうると述べるもの¹⁰、また北の兵士の視点が設定されることで日本人には理解しがたい朝鮮半島の人々の歴史認識が語られることになった等という指摘である¹¹。これらの解釈からすれば、『半島を出よ』は、ステレオタイプ化した北朝鮮イメージを解体し、あらためて描き直したということになる。

もちろん北の兵士の視点から書く試みは、描き出される北朝鮮像に一定程度の深みを与えるものであろう。そのためいくつかの批評が言うように、この北の視点の設定に新たな文学形式を見ることはできる。しかし『半島を出よ』における北の兵士の視点という設定は、すでに述べたように、北朝鮮／日本＝前近代／近代という枠内に収まるものでしかない。このことは、高麗遠征軍の生き残り二人のいずれもが近代化の方へ向かうことによって示されていた。そう

9 松浦寿輝・星野智幸・陣野俊史前掲鼎談、134頁。松浦寿輝の発言。

10 松浦寿輝・星野智幸・陣野俊史前掲鼎談、124頁。星野智幸の発言。

11 李文鎬「戦後日本作家による北朝鮮表象の研究—1960年代から2000年代を中心に—」博士論文（筑波大学）、2016年、140頁。

であれば、北の視点は、高和政が言うように、北朝鮮のコマンドでなくても構わない程度の他者の視点である。¹²

このことに関して付け加えるならば、チョ・スリョンやキム・ヒャンモクが近代＝日本へと傾き、この二人以外の高麗遠征軍が全滅したことから照らすならば、村上龍が試みたとされる「他者を書く」（松浦寿輝）は、つまるところ他者を消すために他者の視点を設定するというべきものである。同様に「この作品が本当に問題化しているのは、〈他者〉である北朝鮮と〈わたし〉＝日本の対立ではなく、〈他者〉である北朝鮮にまなざされることで忘却していた記憶をよびさまされる日本という主体のありようである」という石川巧の指摘も問題がある。¹³ 世良木の「無知」言説に影響されるキム・ヒャンモクが過去をリセットして現在を再スタートするように、『半島を出よ』は忘却された歴史を呼び覚ますというより、むしろ歴史の忘却の契機となっているのであり、「記憶をよびさまされる日本という主体」が問題化されているとは言い切れないからである。

したがって『半島を出よ』が生み出した文学形式とは、植民地の歴史に触れつつも忘却するための、そして他者を描きつつも消し去っていくための構成であり、設定であり、それに基づいた内容である。そのため北の視点という設定も、北朝鮮の内側から書くことを可能にしつつ、しかしそこから現れでる視線は前近代的なまなざしとして処理可能なものでしかない。その意味で他者を消し去っていくための文学形式とは、厄介な者を飼いならすものだということであり、それは図らずも旧帝国との再接続となっているのである。

生き残ったチョ・スリョンとキム・ヒャンモクは、その後も同じように生きるわけではない。チョ・スリョンは自首した後に投獄され、細田佐起子に支えられながら監獄で日本語を学び、詩人であった父と同様に詩を書き、また小説も執筆する（484頁（下））。どのような内容の作品をいかなる文体で書いているのかという問題はあるものの、なにはともあれ他の生き残った兵士が自決するなか彼が自首するのは、北朝鮮の兵士という異質さを鎮めるように見える。他方でキム・ヒャンモクは、病院建物がイシハラグループの作戦によって巻き添えになるなか世良木によって救い出され、住民票システムの混乱に乗じて彼の養女「世良木香」として登録され、法制度的には「日本人」として生きることになる。しかし作品のほぼ終わり部分の後日談で、崎戸島で身を隠すように

12 高和政「俗情の再生産——村上龍『半島を出よ』の想像力」『前夜』第一期七号、2006年春、129頁。

13 石川巧前掲論文、183頁。

して暮らしている彼女は、世良木の実際の孫、世良木容子に向かって、一〇名の兵士がいればこの島を占拠できるとまことしやかな話をする。そのことを容子が祖父に伝えると、彼は「あの子〔キム・ヒャンモク〕は日本人になろうとしてはいない。単に隠れているだけなんだ」（487頁（下））と答える。この点においてキム・ヒャンモクは、チョ・スリョンと異なり、他者性を帯び続ける。その意味において不気味な他者は消え去らずに残り続けている、とは言える。

とはいえしかし、彼女が人民軍の兵士としてのアイデンティティを持ち続けること、つまり日本にとっての分かりやすい他者であり続けることは困難である。高麗遠征軍を壊滅させたのは金正日ではないかと彼女自身が考えるためである（487頁（下））。過去と断絶し、あらためて現在を生き直すキム・ヒャンモクは、今を漂うように「香」として生きざるをえないのである。したがって彼女が「日本人になろうとしてはいない」という世良木の発言は、不気味さを読者に与えつつも、実はあまり問題ではない。むしろ分子的集団、動的なネットワークとしてのイシハラグループが彼女のすぐそばに存在していることがいかなる意味を持つか、そのことを他の村上龍作品と比較しながら検討することが重要な課題となろう。この課題に取り組むことで、大きくずれてしまっている韓国と日本の北朝鮮認識を補正する契機を提供することができればと考える。

Keywords : 村上龍 朝鮮民主主義人民共和国 北朝鮮表象 啓蒙 帝国